東アジア諸言語における音韻論の諸問題に関する調査研究

中世モンゴル語の漢字音訳文献における音訳方式
（孟達来）

韓国語の統営方言における用言の活用形のアクセント
（姜英淑）

中世モンゴル語の漢字音訳文献における音訳方式

1．はじめに

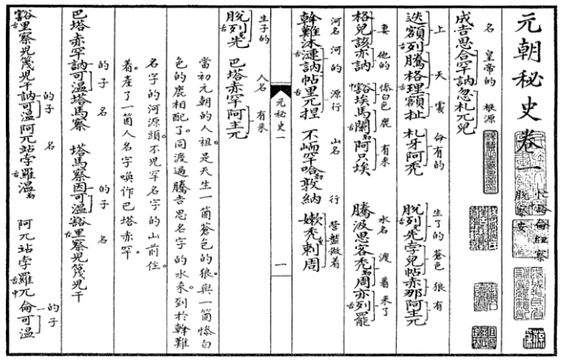
　モンゴル語の時代区分において、一般に、13～15世紀のモンゴル語を中世モンゴル語と言う。この時期のモンゴル語の文献は、主に、ウイグル式モンゴル文字、パスパ文字、アラビア文字、漢字といった幾つかの文字によって記録されており、その中でも、漢字音訳文献である『元朝秘史』と各種『華夷訳語』は、中世モンゴル語の重要な文献として知られている。

　①『元朝秘史』（以下『秘史』）：チンギス・ハーンの一代記を中心に記録した歴史書で、中世モンゴル語の最大の文献である。明の洪武年間（14世紀後半）に漢字で音訳されている。

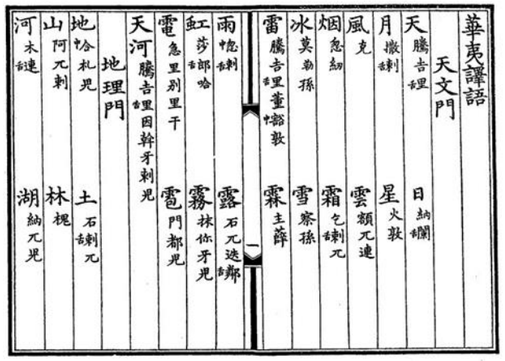
　② 甲種本『華夷訳語』（以下『訳語』（甲））：明の洪武22年（1389年）に公刊された、漢語とモンゴル語の対訳語彙集と文例集である。

　③ 乙種本『華夷訳語』（以下『訳語』（乙））：明の永楽5年（1407年）に編纂された、漢語とモンゴル語との対訳語彙集である。

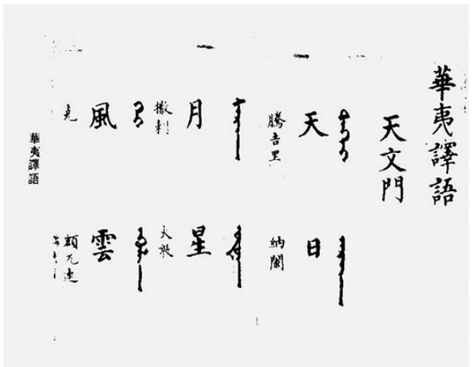
　④ 丙種本『華夷訳語』（以下『訳語』（丙））：明朝と清朝時代に編纂された、漢語とモンゴル語の対訳語彙集である。



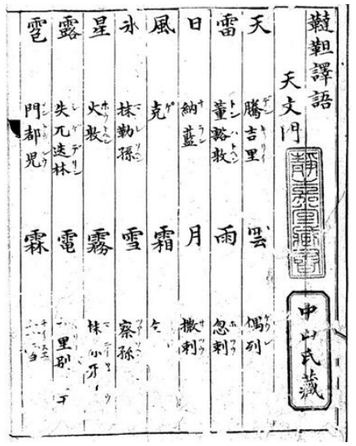
『元朝秘史』（四部叢刊本）



甲種本『華夷訳語』
（涵芬樓祕笈第四集）



乙種本『華夷訳語』
（『韃靼館雑字』）
（中国国家図書館所蔵本）



丙種本『華夷訳語』
（『韃靼訳語』）
（静嘉堂文庫文）

２. 各文献におけるモンゴル語音と音訳漢字

本研究のデータ分析は、自ら作成した中世モンゴル語漢字音訳文献のパラレルコーパスに基づいている。分析の結果、中世モンゴル語漢字音訳文献における音訳漢字の種類、表記されたモンゴル語音の種類、「モンゴル語音→音訳漢字」の音対応の種類、音訳対象語（文節）および音訳漢字の量は、以下の通りである。

『秘史』のモンゴル語音と音訳漢字

	漢字の種類	モンゴル語音の種類	音対応の種類	音訳対象語（延べ）	漢字量（延べ）
秘史(全巻)	576	375	807	28147	97761

『訳語』(甲、乙、丙)のモンゴル語音と音訳漢字

	漢字の種類	モンゴル語音の種類	音対応の種類	音訳対象語（延べ）	漢字量（延べ）
訳語(甲・語彙集)	426	282	426	844	2488
訳語(乙)	289	284	411	845	2495
訳語(丙)	270	342	467	959	2452

『秘史』の場合、モンゴル語の語彙量は延べ語数で約2万8千語であり、モンゴル語音の種類数と音訳漢字の種類数は最も多く、音訳漢字の量も圧倒的に多い。これに対して、『訳語』(甲、乙、丙)の場合、音訳されたモンゴル語は800語余りまたは900語余りであり、その中で、『訳語』(甲)と『訳語』(乙)は、ほぼ同じ語彙項目を有し、モンゴル語音の種類数もほぼ同じである。しかし、『訳語』(甲)には、音表記の特殊方式（後述参照）が用いられているため、音訳漢字の種類数が『訳語』(乙)より著しく多い。『訳語』(丙)の場合、扱われたモンゴル語は口語の特徴が顕著であるため、モンゴル語音の種類数が比較的多くなっている。

３. 音表記の通常方式

漢語（中国語）の伝統音韻学では、漢字１字の音が「声母−韻母/声調」に分けられる。また、「韻母」は、更に「介音−主母音−韻尾」に分けられる。

音節構造の観点からすれば、漢字１字の音は最大 CVC であり、この CVC と「声母−韻母」との関係は、大体、「C（声母）−VC(韻母）」となる。そこで、漢字による音表記の理想的な方式は、漢字１字の原音で、漢字の (C)V(C) といった音節構造をもって表すことであり、それを事例毎に示せば、以下の通りである。

音節構造：モンゴル語音→漢語音

V→V：a→阿 (a)、e→額 (iai)
CV→CV：ba→巴 (pa)、ma→馬 (ma)
VC→VC：an→安 (an)、in→因 (iən)
CVC→CVC：ban→班 (pan)、mang→忙 (maŋ)

１つの例を挙げれば、『秘史』と各種『訳語』において、モンゴル語音 a の表記に、例外なく「阿(a)」の字が用いられている。

【秘史】
阿(a)：2901 回出現。（例）a|u|la 阿|屼|剌／山。
【訳語】（甲）
阿(a)：69 回出現。（例）a|u|la 阿|兀|剌／山。
【訳語】（乙）
阿(a)：69 回出現。（例）a|u|la 阿|兀|剌／山。
【訳語】（丙）
阿(a)：73 回出現。（例）a|mi|tan 阿|迷|壇／生霊。

つまり、音訳当時の漢語音aとモンゴル語音aが音声的に類似するため、「阿(a)」の字で問題なく対応できるのである。

４. 音表記の特殊方式

一方、漢語とモンゴル語の音声や音節構造の違いにより、中世モンゴル語には、漢字の原音で表しきれない音が存在したり、漢字１字の (C)V(C) といった音節構造で対応できない音節が存在したりする。そこで、より精確な音表記をするため、「通常方式」以外の表記方式—「特殊方式」が用いられる場合がある。

『秘史』の場合、こうした特殊表記方式による音対応は、全巻に亘って147種類確認され、それが音訳において成り立つ全807種類の対応関係の約18%を占めている。なお、以下の①と②の場合は、音訳に特殊方式が使用されている。

①モンゴル語の音節頭子音が破裂音qとふるえ音rの場合、q と r に一致する子音が音訳当時の漢語には存在しないため、音訳漢字の左上にそれぞれ小書きの「中」や「舌」を付けて表す。

qの表記（例）

qa→中合（xo）	qo→中豁（xuo）

rの表記（例）

ra→舌剌（la）	re→舌列（liɛ）

音表記において、これらの漢字は小書きの「中」や「舌」と合わさって機能するため、１種の音訳字として扱うのである。

②中世モンゴル語において、n, b, q, k, m, l, s, š, t, č, r, ng の12種類の音節末子音が存在する。これに対して、音訳当時の漢語の韻尾は n, m, ŋ の３つの種類しかない。そのため、モンゴル語の音節末子音を漢語の韻尾で表しきれず、音節を分解して、末子音を単独の漢字で表すという手法が用いられている。このような末子音表記において、音訳漢字を小書きにする場合がある。

音節末子音の表記（例）

末子音 b→卜（pu）	末子音 q→黒（xei）	末子音 k→克（k^hei）
末子音 l→勒（lei）	末子音 t→惕（t^hi）	末子音 r→児（ʒï）／舌児（ʒï）

なお、これら音表記の特殊方式は、主に、『秘史』や『訳語』（甲）の音訳に用いられている。

５.音訳における音以外の要素の関与

中世モンゴル語の漢字音訳文献において、特に、『秘史』や『訳語』（甲）の場合、音訳漢字の選択には、音表記だけでなく、モンゴル語の意味や接尾辞に関連付けて漢字を選択するといった、音訳において「音以外の要素」が関与される現象が良く見受けられる 。

意味に関連付けて音訳漢字を選択する手法は、『秘史』の音訳方式の一つの特徴である。『秘史』の全巻に亘って確認された「音以外の要素の関与」は260種類であり、それが全807対応関係の約32%を占めるのである。

また、『秘史』のモンゴル語漢字音訳における「音以外の要素の関与」については、①音訳された語の意味に関連するもの、②特定の語の音訳に使用されたもの、と分けてみることができる。その内訳は、以下の通りである。

①モンゴル語の語幹（又は接尾辞）の意味に関連する対応は149種類であり、それが全ての「音以外の要素の関与」の約57%を占める。そのうち、モンゴル語の語幹の意味に関連するのが146種類であり、圧倒的に多い。接尾辞の意味に関連するのが3種類だけである。

②モンゴル語の語幹（又は接尾辞）への音訳漢字の特定使用による対応は111種類であり、全「音以外の要素の関与」(260種)の約43%を占める。そのうち、音訳漢字がモンゴル語の語幹に特定的に使われたのは97種類であり、接尾辞に特定的に用いられたのは14種類である。

『秘史』の音訳と酷似する『訳語』（甲）の場合も、音訳漢字の使用において「音以外の要素の関与」が確認されている。また、『訳語』(乙)と『訳語』(丙)に関しても、『訳語』(甲)の音訳漢字を継承したことがあるため、少ないのであるが、音訳漢字の使用において「音以外の要素の関与」が確認されている。

６. 音訳漢字の使い分けの事例

上述したように、音訳漢字の選択において、音表記だけでなく、音以外の要素も考慮しており、そのため、同じモンゴル語音の表記に２種類以上の漢字が対応する現象が見受けられる。右のデータは、各文献におけるモンゴル語音baに対応する音訳漢字の内訳である。データが示すように、『秘史』では、 ba の表記に使われた「巴、罷、把、八、杷」といった漢字の使い分けは、「巴」が音表記にのみ用いられる。「罷」が動詞過去形接尾辞-ba/-beの表記にのみ使われ、意味関連が認められる。「把」が特定の語に用いられた傾向がある。「八」が巻１と巻２に集中的に現れ、「杷」が特定の語に用いられている。このように、同じモンゴル語音に対応する複数の音訳漢字において、それら漢字の使い分けが認められるのである。

『訳語』（甲）と『訳語』（乙）に関しても、音訳漢字の意味関連や特定使用が認められる。一方、『訳語』（丙）の状況はやや異なるが、データが示すように、「八」の使用に関しては、『訳語』（甲、乙）の使い方を受け継いでいることが認められる。

【秘史】

巴(pa)：742 回出現。音表記のみに使用。

罷(pa)：587 回出現。動詞過去形接尾辞-ba/-be の表記に使用。

把(pa)：231 回出現。意味関連・特定使用。

八(pa)：5 回出現。巻 1、巻 2 に集中。音表記のみに使用。

杷(p^ha)：1 回出現。特定使用。

【訳語】（甲）

巴(pa)：23 回出現。音表記のみに使用。

八(pa)：10 回出現。特定使用。

把(pa)：3 回出現。意味関連・特定使用。

【訳語】（乙）

巴(pa)：23 回出現。音表記のみに使用。

八(pa)：10 回出現。動詞過去形接尾辞-ba の表記に使用。

把(pa)：3 回出現。意味関連・特定使用。

【訳語】（丙）

把(pa)：40 回出現。音表記のみに使用。

八(pa)：1 回出現。動詞過去形接尾辞-ba の表記に使用。

7. おわりに

中世モンゴル語の漢字音訳文献において、特に、最大の文献である『秘史』の場合、モンゴル語音を精確に表記するために、発音記号のような小書きの「中」「舌」を用いたり、音節末子音の表記の際に、音節を分解して、末子音を単独の漢字（多くの場合は小書きの漢字）で表記したりするなど、音表記の面でかなり工夫していることが認められる。こうした音表記の「特殊方式」は、『訳語』（甲）の音訳にも見受けられる。これは、中世モンゴル語漢字音訳文献における音訳方式の一つの大きな特徴であると言える。

一方、漢字音訳文献における音訳方式のもう一つの大きな特徴は、音訳において、単なる音表記だけでなく、漢字の「義」の要素や「形」の要素も、モンゴル語の意味や特定の語に適応されている現象である。このような現象は、特に『秘史』の音訳に著しく現れており、また、『訳語』（甲）や『訳語』（乙）、ないし『訳語』（丙）の音訳にも見受けられる。このことから、漢字による音訳方式を研究する際には、「音表記」だけでなく、音訳における「音以外の要素の関与」も視野に入れて、漢字の「形・音・義」の視点から音訳方式を考察することが重要であると考える。

参考文献

- 越智サユリ(2004)「華夷譯語丙種本『韃靼譯語』におけるモンゴル語について」京都大学言語学研究（第23号）
- 栗林均(2006)「『元朝秘史』におけるモンゴル語音訳漢字書き分けの原則—u/üを表す漢字を事例として—」『東北アジア研究』（第10号）東北大学東北アジア研究センター
- 栗林均(2007)「『華夷訳語』(甲種本)における同音漢字の書き分けについて」『華夷訳語論文集』大東文化大学語学研究所
- 陳垣(1934)『元秘史譯音用字攷』國立中央研究院歴史語言研究所
- 服部四郎(1946)『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』文求堂
- 孟達来(2020)『『元朝秘史』におけるモンゴル語漢字音訳方式の研究』風間書房
- 山崎忠(1951)「甲種本華夷訳語の音訳漢字の研究—語彙の部」『天理大学学報』(第3巻第1号)

韓国語の統営方言における用言の活用形のアクセント

１．背景

◆日本語の東京方言における動詞や形容詞の辞書形のアクセントには、２つのピッチパターンが区別される。１つは、高いピッチで終わるもの（⓪型）、もう１つは、後ろから2番目の拍に下降が現れるもの（－②型）である。

（赤：高いピッチ、黒：低いピッチ。以下同様）

【⓪型】

アク（開く）

アケル（開ける）

カゾエル（数える）

【－②】

カク（書く）

シメル（閉める）

シラベル（調べる）

◆ 動詞の活用形のアクセント

東京方言の動詞のアクセントは、過去形や仮定形などの語尾が付くと、辞書形と異なるアクセント型で発音される（下線部を参照）。

（1）	辞書形	過去形	否定形	テ形	仮定系
【⓪型】					
アク（開く）	アク	アイタ	アカナイ	アイテ	アケバ
アケル（開ける）	アケル	アケタ	アケナイ	アケテ	アケレバ

→「-バ」は、その直前の拍で下降が現れるという規則性がある。

【－②】					
カク（書く）	カク	カイタ	カカナイ	カイテ	カケバ
シメル（閉める）	シメル	シメタ	シメナイ	シメテ	シメレバ

→「-ナイ」は、その直前の拍で、「-タ／-テ／-バ」は、その語尾の位置を基準に、後ろから2拍目で下降が現れるという規則性がある。

◆ 形容詞の活用形のアクセント

東京方言の形容詞のアクセントは、過去形や仮定形などの語尾が付くと、辞書形と異なるアクセント型で発音される（下線部を参照）。

（２）　　辞書形　　過去形　　否定形　　仮定系

【⓪型】

アカイ（赤い）　アカイ　　アカカッタ　　アカクナイ　　アカケレバ

→「-ナイ」の第1拍目に下降が現れ、「-カッタ／-ケレバ」の直前の拍に下降が出るという規則性がある。

【－②】

ヨワイ（弱い）　ヨワイ　　ヨワカッタ　　ヨワクナイ　　ヨワケレバ

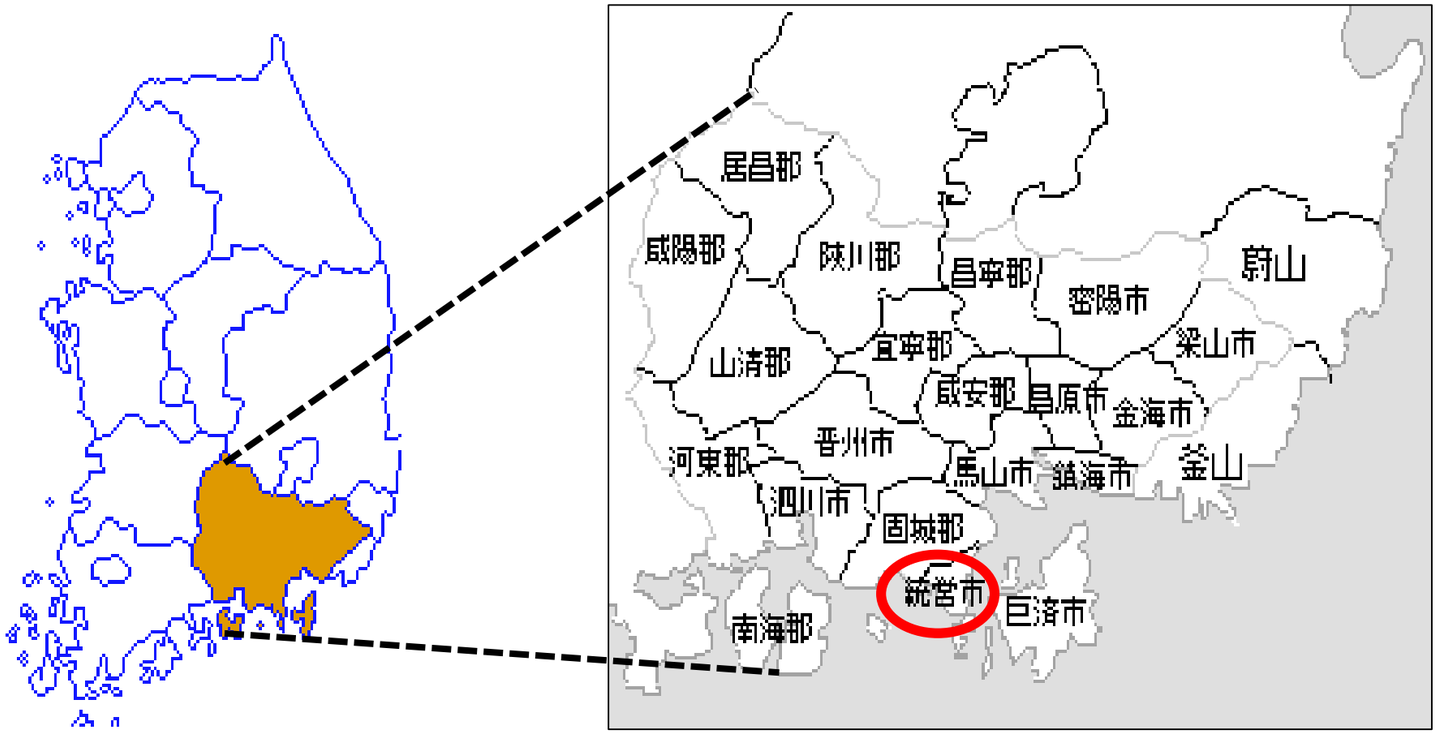
→「-カッタ／-ケレバ」は、語尾の位置を基準に、後ろから２拍目に下降が現れ、「-ナイ」は後ろから3拍目に下降が現れる。

※ 若い世代の間では、形容詞の⓪型の辞書形を-②型で発音する人が増えつつある　。　例）マルイ（丸い）→　マルイ

2．目的

① 韓国語方言における用言のアクセント特徴は？
② 活用形におけるアクセントの規則性は？
③ 世代の差は見られるのか？

→ 韓国の慶尚南道に位置する統営（Tongyeong）方言を中心に考察してみよう。



3．調査

◆調査語彙の選定：動詞や形容詞の調査資料、約350語。

◆ 調査方法：１音節語から５音節語までの動詞や形容詞を対象に、その辞書形・語尾付き形の発音を、読み上げ形式で調査・分析。

・語尾の種類
- Ⓐ -ta（辞書形）、-at/ət（過去形）、-ko（並列の接続形）
- Ⓑ -(ɨ)mən（条件形）、-(nɨ)nta（現在形）

◆ 話者：統営市（ミス洞）の生え抜きの2名の男性。

① 1949年生まれのK氏：徴兵期間の約３年間は外住、高卒。
② 1960年生まれのP氏：仕事のため隣の市で約2年間外住、高卒。

４．結論

◆ 動詞や形容詞の辞書形のアクセントには、下降の位置によって弁別されるもの（①型）と、文節全体のピッチの形で弁別されるもの（－②型、＝型と∧型）の2種類が存在する。

（３）用言の辞書形のアクセント

	１音節語幹用言	２音節語幹用言	３音節語幹用言
①	뻗다（p’ətt’a） （伸ばす）	고치다（koᶜʰit’a） （治す）	쏟아지다（s’otacita） （溢れる）
–②		다듬다（tatɨmt’a） （整える）	가리치다（karicʰita） （教える）
＝	차다（cʰata） （蹴る）	그리다（kɨrit’a） （描く）	주무시다（cumusita） （寝る）
∧	얻다（ətt’a） （得る）	넘치다（nəmcʰit’a） （越える）	모자리다（mocarita） （不足する）

◆ 用言の辞書形のアクセントは、基本的にⒶの語尾が付く場合、辞書形と同じアクセントを保持する。一方、Ⓑの語尾が付くと、１音節語幹用言の①型では下降の位置が１音節後ろにずれる現象が生じる。

（４） Ⓑの語尾付き活用形におけるアクセント

	１音節語幹用言	２音節語幹用言	３音節語幹用言
①	뻗으면（p’ətɨmən） （伸ばせば）	고치면（kocʰimən） （治せば）	쏟아지면（s’otacimən） （溢れれば）
–②		다듬으면（tatɨmɨmən） （整えれば）	가리치면（karicʰimən） （教えれば）
＝	차면（cʰamən） （蹴れば）	그리면（kɨrimən） （描けば）	주무시면（cumusimən） （寝れば）
∧	얻으면（ətɨmən） （得れば）	넘치면（nəmcʰimən） （越えれば）	모자리면（mocarimən） （不足すれば）

◆世代間の違いは見られないものの、両者ともに語尾がついて文節全体が６音節以上になると、∧型が－②型で発音される傾向がある。

参考文献

1）姜英淑（2017）『韓国語慶尚道諸方言のアクセント研究』勉誠出版

2）孫在賢（2007）「韓国語諸方言アクセントの記述研究」東京大学人文社会系研究科言語学専門分野博士学位論文

3）松森晶子ほか（2012）『日本語アクセント入門』三省堂